1日約60人の避難者が訪れるAMDAの救護所。避難所生活が長期化し、医療ニーズも変化している＝26日、熊本県益城町

被災地から

本紙記者報告

24時間 心と体支え続け

熊本地震で大きな被害が出た熊本県益城町。町立広安小学校の一室に避難者が次々と訪れる。赤ちゃんを抱えた母親、つらそうな表情の男性、持病のあるお年寄り…。対応するのは国際医療ボランティアAMDA（本部・岡山市）の医師や看護師。ここはAMDAが運営する救護所だ。1日約60人が訪れ、薬剤師や介護士らを含め10～20人で24時間の診療を行う。

「想像以上にひどい状況。余震が収まったとしても家が壊れて戻れない人は多いとみられ、改善の見通しが立たない」。スタッフの難波妙さん(52)は漏らす。

同じ敷地内にある避難所では、14日の「前震」から10日以上たった今も約300人が生活している。さらに数百人は運動場で「車中泊」を続けているという。この〝避難の長期化〟が住民の健康をむしばむ。

地震発生当初は、打撲や切り傷といった外傷治療が中心だったが、この1週間で医療ニーズは変化した。「風邪をひいた」「熱がある」「せきが止まらない」「持病が悪化した」。そして「夜眠れない」―。

難波さんは「避難生活にプライバシーはない。硬く冷たい床に毛布を敷いて寝る生活では疲れがたまるし、ストレスも相当。それが長く続き、みんな体調を崩しがちになっている」と説明する。

26日に腰の痛みを訴えて訪れた鳥越亮介さん(38)。14日の「前震」後から同小の避難所にいる。昼は両親と校内で過ごし、夜は1人で車の中で寝る生活。「今の暮らしが続くと、状態がもっと悪くなりそう」と不安を口にした。

重症患者も出てきた。先日は、80代男性の床ずれがひどくなって県内の病院に移したが「緊急事態の今、どの病院も満床状態が続き、いつでも移送できるわけではない」(AMDA)。福祉サービスを提供する「福祉避難所」不足の問題も浮上している。

益城町出身の難波さんは、今回の地震で実家が倒壊した。避難者の気持ちを理解しながら、傷ついた古里で引き続き活動しようと考えている。言葉に力を込めた。「地元の医療、福祉体制が回復する日まで、ここにいるみんなの心と体を支えたい」

（秋山昌三、岡崎創史）